The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	哀傷
Author(s)	宮川, 真弥
Citation	語文. 2020, 115, p. 14-15
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/88508
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

哀傷

宮川真弥

研究者への最大の讃辞として、この人を失えば斯界の研究が大きく遅れるというものがある。平安文学の本文研究において、我々はこの慨嘆を共にすることになってしまった。

本稿の務めは門弟の立場で在りし日を振り返ることにあろう。いささかの問わず語りをお許しいただきたい。

地方国立大学教育学部出身で研究者志望の大学生が、大阪大学の大学院を志望したのにはいくつかの理由があった。師曰く、国立で研究者を目指すのであれば旧帝国大学である、阪大は面倒見が良いようだ、そして、就くのであれば若い研究者が良い、と。枕草子の本文か享受史を研究主題にしようと考えていた私が、大阪大学と名古屋大学とで前者を選んだのは、その時はまだ素直だったからに他ならない。

枕草子研究をしようと加藤先生に就いたはずが、入ってすぐの荒木浩先生の徒然草寿命院抄の演習で所引枕草子を調べ始めてから雲行きがあやしくなり、翌年の大阪大学古代中世文学研究会（古代中世）で春曙抄と磐斎抄の本文成立過程、修士論文で板本春曙抄の諸本系統と到ったのだから、博士後期課程の面接時、例のからかうような口吻での「うちで良いの」（と飯倉洋一先生のうちもちょっと違うなあ）はあるいは本音だったのかもしれない。

その後、博士後期課程に入ってから四年のあいだ板本の匡郭を測り続け、年に一度の面談以外は特に研究の相談に行くこともなく、六年間の最後の二年でようやく季吟に専念した私を、それでも先生はついぞ矯めようとはされなかったように思う。仄聞するところによると先行きを心配しないわけではなかったらしいが、来る者拒まず去る者追わずの姿勢を保ち続けられた。

私の研究に対しては、労多くして功少なしだと「よくやるねえ、僕ならしないよ」の台詞とともによく言われたが、ただ一度だけ褒められたことがある。後に日本近世文学会賞を受賞することになる源氏物語打聞の研究について、古代中世で発表したときの講評に曰く「これをものに出来なかったら破門だ」と。

普段は論文の斧正を請うても論旨は結構との一言のみであったが、このときの日本近世文学会の発表要旨だけは三往復の添削をいただいた。以前、匡郭の拡縮関係で当該学会発表に落選していたことも影響したのかもしれないが、結局博士論文まで論文に添削が入らなかったことからするときわめて異例で、ここが勘所だと悟られたのではなかったか。

日本学術振興会特別研究員の申請書の当落予想を嬉々としてするなど、とかく研究の評価に鋭敏な方だった。科研を途切れさせたことがないというのも自慢の種にされていたが、門下生が次々と特別研究員に通るのをみた学会の若手が代筆疑惑を冗談で口にするほどであったのを、さてご存じであったろうか。

浮説はさておき、ただ、相次いだ特別研究員の採用に、先生の推薦書が効いていた面は、おそらくあったに相違ない。申請者を経由せずに推薦書は提出されるので、どのような内容が書かれていたのかはわからない。いつか教え子の推薦書を書く必要に迫られたら、それを口実に見せてもらおうとの企みは、しかし叶わぬ願いになってしまった。とかく書類の多い昨今のこと、助成金申請や貴重書閲覧、就職の推薦書など、度々手を煩わせたが、いつも二つ返事で引き受け、即座に書類を作成してくださったことがとてもありがたく、私自身、範を先生にとり、快諾を旨としている。ちなみに、先生はＩＣＴに強く、申請書や校本の作成にLaTeXを使用されていたのは、案外知られていないかもしれない。

先生は学会で門下生を紹介してまわる質ではなく、たまの懇親会でも門下生と話していらっしゃることが多かったが、集中講義の講師の人選にはかなり意を用いられていたように思う。佐々木孝浩先生に講師を務めていただいた縁で斯道文庫に寄寓することとなったのは、私の人生にとって大きな転機であった。集中講義の人選も、大学院演習の課題設定も、それぞれ在籍院生に合わせたもので、直接間接に導かれていたことを知る。

こうして思い返すと、加藤先生のもとでの九年間、即かず離れずの関係で、大きな悩みもなく健全に過ごせたのは、先生との相性が良かったためなのだろう。先生とはちょうど二回りの年齢差で、はじめて酒席をともにした新入生歓迎会の席上、寅年生まれの助教さんに同じ干支とは相性が良いんだと語った口で、私に「寅年の男とは合わないんだよね」とおっしゃったのが懐かしい。そうでもなかったんじゃないかと聞く機会はもう訪れないが、尋ねても「やっぱりいまいちだったね」と言われるような気もする。

還暦を迎えることなく泉下の客となられたことで、大阪大学を選んだあのときの決断の根拠のひとつが永遠に失われてしまった。思うに、研究を通じての関係にあった私には、学恩に報ずることこそが唯一の恩返しなのだろう。これから加藤先生の謦咳に接したことのない学生ばかりになっていく古代中世や大阪大学国語国文学会において、先生の余薫を感じてもらえるか否かは我々門下生の肩に懸かっている。ただ、叶うならば、せめて今しばらくは懐旧の情に浸りたい。

（みやがわ・しんや　天理大学附属天理図書館司書研究員）